

① 名人
② 細かい
③ 昼食

④ 活気
⑤ 通行

②
① うし
③ から
〔ため・せい・ゆえ〕

② A イ
B オ
C エ

③ 軽
④ 温度

⑤ イ
⑥ ウ

③
① ウ
② ア
③ イ

② I イ
II ウ
C エ

④
1・4・6

〔順不同・完答〕

| 配点 | |
|---------|------------|
| ① | 各2点×5=10点 |
| ②~③ | 各5点×18=90点 |
| <計>100点 | |

1 小学校2年生までに学習した漢字から出題している。①「名人」はすぐれた腕前をもつ人。「名」には「名前」以外に、「名高」い・すぐれた」という意味がある。②「細かい」は「細い」とも読む。「いとへん」を正しく六画で書こう。③「昼食」は「昼ごはんのこと。同様に朝ごはんは朝食だが、晩ごはんは夕食という。」「旦」を「日」や「且」のようにしてはいけない。④「活気」は生き生きとした気分、ふんいき。「活」には「生きる・生活する・役立てる」という意味がある。⑤「通行」は通る、行き来すること。「しんにょう」の形に気をつけて書こう。

2

1 ① あとの「〜でしようか？」に合うことばになる。説明文では、本文の初めの方にこのような問いかけが出てくることが多い。その問いかけに答える形で説明が続いていく。
③ 前の文の内容の理由になることを、この文で述べている。温まると軽くなって上に上がっていき、冷めると重くなって下へしずんでいく「から」上下のお湯が入れかわるのであった。

2 A・B 浴そうにお湯を入れるとやがて浴そうはお湯でいっぱいになる ↓ しかし ↓ そのままにしておくとお湯と入れかわる。お湯は温度が下がりはじめると ↓ すると ↓ 下から温かいお湯が上がってきて、上の方の冷めたお湯と入れかわる。
C 水の対流はほかにもある ↓ たとえば ↓ なべやかんでお湯をわかすときにも対流が起きている。

3 本文をよく読んで確実に正解してほしい。温かいお湯が下から上がってくるのは、軽くなったからであった。風船など軽いものがうかびやすいことは日ごろの生活でも知っていることだろう。自分の持っている知識と照らし合わせながら本文を読む習慣をつけよう。「熱い」では、「温かいお湯」なので当たり前だし、「お湯が上がって」くる理由にならない。

4 重い水が下にしずみ、軽い水が上に上がるので、重さのちがいによって対流が起こるのだが、その「おもとの原因」は、何のちがいであったか。「温まると体積がふえて軽くなり、上の方へ上がっていく」「冷めると体積が小さくなって重くなり、下へしずんでいく」とあった。

5 「対流」は「温度の異なる水が下から上へ、上から下へと動いていくこと」であった。ア・ウは確かに「なべやかん」で起きていることだが、これは沸騰（煮え立つこと）であって対流ではない。水の動きがないのでエも対流ではない。

6 本文を参考にして考えれば、「暖房エアコン」の温かい気体は軽いので上の方へ上がることになる。「上向き」にしてしまうと、上の方ばかりが温まることになる。上下の空気の入れかわりも起こらない。

3

1 ① 「むしように」は、ある感情がおさえきれずに強くわき起こるようす。「暑い」から「のどがかわいてきた」のだから「なぜか」はあてはまらない。

② 「とんで（とぶ）」には、速く走る・急いで行くという意味がある。若返ったことを「早くおばあさんに知らせよう」として急いだのであるが、じつさいに飛ぶはずはない。

③ 「さっそく」は、すぐに、すみやかに行うようす。おばあさんは、若返ったおじいさんが「うらやましくてたまらず」急いで「山へ出かけていった」のであった。

2 I 「ふさふさ」は、たくさんたれ下がっているようす。人間の体では「髪」が豊かなことに使う。

II 老人はどこが「まがって」いるものだろうか。

3 A 問2 IIと同じく、老人らしいものが答えになる。ア「あせ」は若者もかくだろうし、あとの「なくなつて」に合わない。ウ「つや」・エ「はり」ではもつと年老いたことになる。

B あとの「なにをいうか……わしじゃがな」に合うものをえらばなければならない。声でおじいさんと分かって出てきたおばあさんは、すっかり若返ったおじいさんを見て、まったくの別人だと思ったのである。イ・ウでは、おじいさんが若返ったことを知っていることになる。アでは何かを飲んで若返ったことまで知っていることになる。

C 若者を通りこして赤んぼうになっていることから考える。おばあさんはおじいさんのことが「うらやましくてたまらず」「明日まで待てというのをふり切つて」「出かけていった」のであった。「欲が深いもんだから」「おじいさんよりもつと若くなりたいたい」というおばあさんがやりそうなことが答えになる。ア・イ・ウでは清水を飲んでいないことになる。

4 かんちがいをしないよう、落ち着いて読んでほしい。また、場面のようすとそれぞれの人物の心情が感覚的に分かっていることが重要である。日ごろからしっかり読書をしている生徒なら、通読の際にどちらがあてはまるかを理解しながら読めたことだろう。